

工事現場のイメージアップの工夫について

内閣府沖縄総合事務局開発建設部技術管理課 工事検査官 たいら ひろたか
平良 博孝

1. はじめに

沖縄県は、日本の最南西に位置し気候は亜熱帯性の温暖湿潤気候の属する高温多湿な地域です。また、文化的には日本本土とは異なる文化が息付いています。

ここでは、沖縄の気象や文化の特徴に即した、工事現場のイメージアップ事例を紹介します。

工事現場のイメージアップとは、地域との積極的なコミュニケーションを図りつつそこで働く関係者の意識を高めるとともに関係者の作業環境を整えることにより公共工事の円滑な執行に資することを目的とするものです。



写真 1 施工時の避暑設備として遮光ネットの設置

2. 実施事例

【事例 1】安全関係（避暑対策）

熱中症対策による熱中症防止

熱中症とは、高温多湿な環境下において、体内の水分および塩分（ナトリウムなど）のバランスが崩れたり、体内の調整機能が破綻するなどして発症する傷害です。

沖縄地方は、高温多湿のため熱中症を起こしやすい地域といえます。特に工事現場の炎天下のコンクリートやアスファルトの作業環境下は厳しいものです。工事関係者の熱中症発症については、毎年のように報告があり、工事現場ではさまざまな熱中症対策の取り組みがなされています。

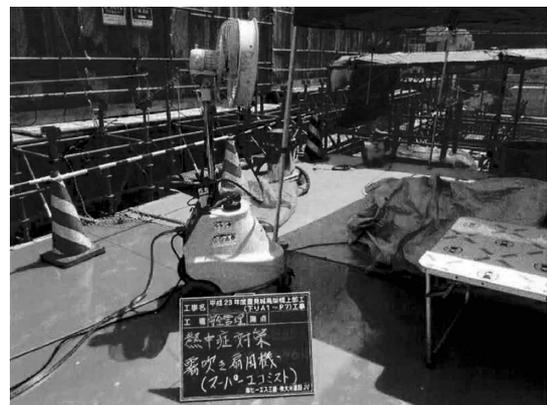


写真 2 施工時の避暑設備としてエコミストの設置



写真 3 熱中対策スプレー・熱中あめの常備



写真 4 WBGT看板の設置

熱中症の予防対策には、「日よけで直射日光をさける」「積極的に水分や塩分を補給させる」「頭や体を冷やす」などがあります。また、「暑熱環境による熱ストレスの評価を行うWBGT値（暑さ指数）の活用」も望ましいとされています。

WBGT値とは、乾球温度・自然湿球温度・黒球温度から算出する数値で、基準値を超えるおそれがある場合には、熱中症にかかる可能性が高くなるため、熱中症予防対策について徹底を図る必要があります。

本事例現場では、熱中症対策のさまざまな取り組みにより、熱中症の症状を訴える工事関係者は

おらず、沖縄の強烈な直射日光の中で作業効率を損ねることなく工事を進捗しました。このことは、工事目的物の品質確保にも十分に寄与したものと考えられます。

【事例 2】安全関係（工事標識等安全施設のイメージアップ）

シーサーバリケード設置による一般車両への注意喚起および事故防止

シーサーとは、伝説の獣の像で、建物の門や屋根、村落の高台などに据え付けられ、家や人、村に災いをもたらす悪霊を追い払う魔除けの意味が

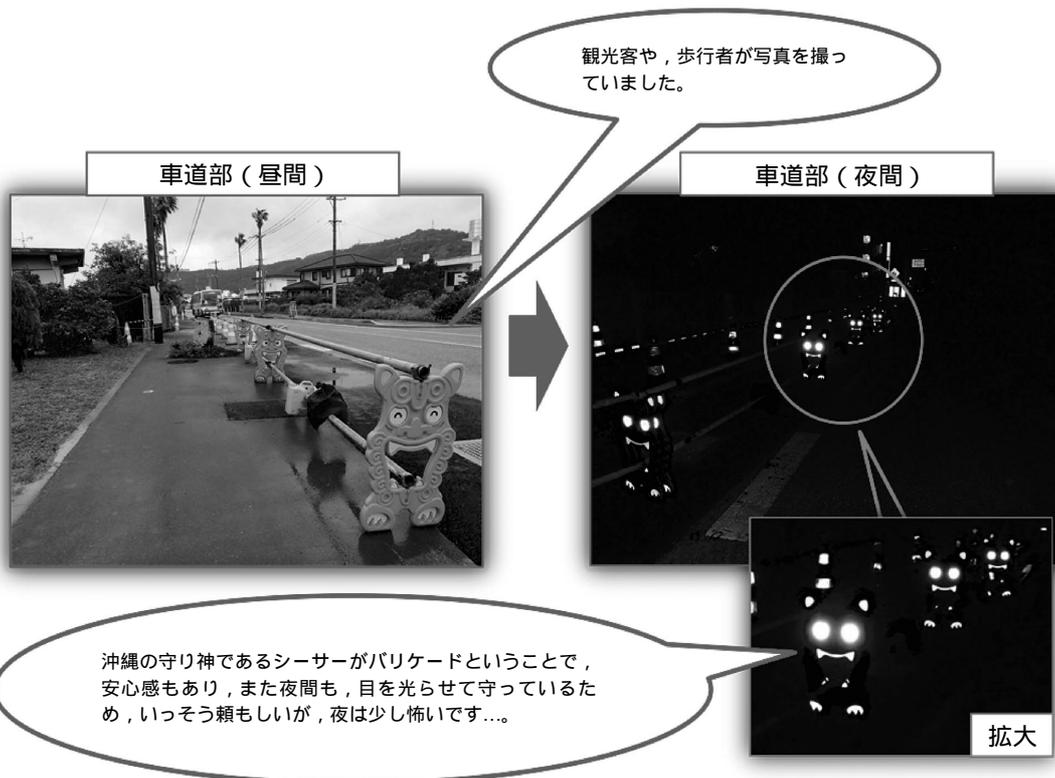


写真 5

あります。名前は「獅子^{しし}」を沖縄方言で発音したものです。スフィンクスや中国の石獅、日本本土の狛犬などと同じく、源流は古代オリエントのライオンもしくは犬と伝えられています。

本事例現場では、シーサーバリアード設置により事故もなく一般車両が安全で、気持ちよく通行できたものと思われま

す。無事故であることは、本来の工事関係業務に集中することができるため、工事目的物の品質確保につながったと考えられます。

【事例 3】 地域とのコミュニケーション（地域行事等の経費）

地域行事「糸満ハーレー（ハーリー）」のお手伝い

初夏の沖縄で、もっとも活気ある行事はハーリーです。県内各地の漁港で、サバニと呼ばれる伝

統漁船を使ったレースが繰り広げられます。ハーリーとは、海人^{うみんちゅ}（＝漁師）による豊漁や航海無事を祈願するための祭りで、今から約600年前の琉球王朝時代に、中国から伝来したといわれる漁師文化です。ハーリー^{かね}鉦の音が響き渡ると、梅雨が明け、本格的な夏が訪れるといわれています。

本事例現場では、地元糸満市の伝統行事である糸満ハーレー（ハーリー）のお手伝いとして、糸満漁港と打ち合わせを行い糸満ハーレーの見物客が岸壁から海に落ちないように、カラーコーンに「転落注意の喚起」を行い、無事祭りを終えています。このことにより、糸満漁港からは感謝の言葉をいただいております。地域に貢献できたことは、工事関係者の喜びであり、それによって工事関係者の工事への取り組みのモチベーションは向上し、工事目的物の品質確保も向上したものと考えられます。



写真 6 転落防止設置完了



写真 7 糸満ハーレーの様子

【その他の事例】



写真 8 沖縄では英語標記は重要です



写真 9 ウチナー（沖縄）文化の基礎であるウチナーグチ（沖縄語）の標記で市民と親しみやすく

3. おわりに

建設産業は、ものづくり産業であり「人」が支える産業です。現場関係者がより快適に安全・安心して作業を進めることができる環境整備を図る

ことは、品質確保の向上から重要な視点です。また、地域とのコミュニケーションを通して建設業界のイメージアップを図ることは、将来の建設業の人材確保にもつながると期待されます。

その意味において、工事現場のイメージアップは必要不可欠な取り組みであり、今後とも受発注者で協力し推進していきます。